山と博物館

第25巻 第2号　1980年2月25日　大町山岳博物館

白い稜線　　撮影　伊藤則夫

山歩き三昧

幼い頃、父に連れられて、丹沢の大山、富士山などに登った。真白い山伏の衣裳に草鞋をはいて、小さな金剛杖をもって。

大人から「可愛いいね」と頭をなでられて恥かしかった事だけ憶えている。

中学時代、校長が登山家で、遠足といえば必ず山だった。小佛峠、刈寄山、鷹取山など東京周辺の小さな山は、その頃歩いた。

中学三年の冬、友と二人で奥多摩の大岳・馬頭刈山を歩いた。松原村の十里木から馬車でシャンシャンと本宿部落の橘屋まで。

客は二人だった。五右エ門風呂のぬるぬるした中蓋や、薄暗いランプの印象が強烈だった。宿の女中がいがぐり頭の中学生を珍らしがって、夜おそくまで歓待してくれた。最後には相当きわどいそぶりを見せて。若い二人は青くなって布団にもぐりこんだ。眼に険のある美しい女だった。今になって、ちょっと惜しかったと思う。

宿賃は二円だった。大きな握り飯を二つ、風呂敷に包んで斜めに背負い意気揚々山に向った。大岳の山頂で水筒一杯の水が三十銭で肝をつぶした。歩きながらかじった洋梨が素敵に美味かった。山の虜になった。

昔の教え子達に招かれて登った十勝の富良野岳は、紙くず一つ落ちていなかった。山荘の近くで小犬と遊んでいた妻が、野狐と知って信じられぬ顔をした。山を知り山を愛する者のみ行く山はチングルマの咲き乱れる自然の姿も人の心も昔と少しも変らなかった。

砂礫の斜面いっぱいに咲くコマクサの可憐な姿に酔って、半日をねころんで過した南八ツ硫黄岳。いまでも咲いてくれるのかしら。

生活の科学化は、人間から「自然」を奪った。我々は眼に見えぬ檻に入れられてあった。動物園の猛獣の欲求不満を哀れむ人間が、実はより大きい檻の中でヒステリックに動いている事を悟るべきである。それは恐しい事である。

（静岡大学教育学部　山門　昇）

郷土の生い立ちを考える（3）

平林照雄

五、松本平のでき方

安曇野へ初めて来た人は、信州のような山国に平坦な盆地があるのに驚きます。私たちは松本平とか松本盆地と呼んでいます。日本列島の各地に、大小多数の山間盆地が発達しております。しかし、本州の最も幅の広い部分を横断して、白馬、仁科三湖、松本、諏訪、甲府の各盆地がじゅずつなぎに並んでいる地形は不思議です。これらの盆地のあるところは、糸魚川静岡構造線と呼ばれる全国的にも最大級の断層帯に当たっているのです。この構造線を境にしての両側の地質は全く異なっており、一億年もの大昔から地質構造的に不連続性をもっておりました。私たちが東山と呼んでいる部分はフォッサ、マグナの新しい地質の地域に属し、西山は日本アルプスの古期岩類からできています。この両者の境界部にずっと新しい地質時代（第四紀洪積世）になって、断層活動が盛んに行われ現在のような地形になったのです。

山間盆地ができる最も簡明な形式は、断層で周囲を切られた地塊が、相対的に沈降することです（造盆地運動）。松本盆地が断層によって形成されたことを証明するには、周囲の断層を確認することです。たしかに、糸魚川静岡構造線に沿う地帯には、南北方向の平行した数本の断層と、これらに斜交する何本かの断層が推定されますが、大きな断層ほど絵に書いたように確認できるものではありません。これらの断層に囲まれた地塊は周囲の山地に対して落ち込む運動をしたと考えられます（地塊運動）。地塊の沈降量の大きかった部分は盆地の発達がよく、排水のされかたによっては湖沼が残ることもあります。松本盆地周辺部の断層の確認や、その動きは実際には複雑難解で研究が進められつつあります。

なお、松本盆地が大昔は広い範囲にわたって湖水の時代がなかったかとよく言われます。出雲の大国主尊の子、武御名方尊が犀川を掘り割ったとか、泉小太郎が山清路の大岩を取り除いたというような伝説があります。このような伝説が残っているのは、大昔から松本盆地に住む人々が水に強い関心をもち、その開発に当たっては治山治水にどんなにか苦労したかがうかがわれます。

松本盆地がかつて大きな湖水であったか否かは、盆地の周辺部や盆地底の堆積物を調べればはっきりします。同じ仲間の諏訪盆地や仁科三湖盆には現在湖があるのですから、松本盆地の湖沼説が出るのも無理はありません。松本盆地の堆積物は西山から運ばれた河床砂礫層が主体で、保水力は乏しく、広い範囲に湖成層を追跡することはできません。松本市の一部や穂高町付近や高瀬川が盆地に出るところには、一時湖沼性堆積物を残すような環境の時期がありました。さらに、松本盆地の沈降と犀川の排水の関係が、湖水の存在と深い関係をもってまいります。しかし、犀川は周囲の山地の準平原時代から大峰面上を流れていて、山地の隆起につれて下方へ侵食し、松本盆地の排水を継続的に行ってきたと考えられる古い河川（先行性流路）であることは、その流れ方からも推定されます。

青木湖を堰止めている佐野坂の山

六、謎の多い仁科三湖

農具川によって貫流されている仁科三湖は大糸線からながめると、清澄な山の湖の印象を与えます。三湖は糸魚川静岡構造線に沿ってできた断層湖であることは、一見して推定されます。特に西側の仁科山脈の山腹は、一気に湖底に向かって急傾斜しており、断層崖の地形を呈しております。なお、湖水の東側の湖岸段丘層中にも若い断層が確認されております。断層湖の特徴として、面積の割合に深くて、青木湖などは周囲六・六平方kmの小湖なのに、六二mもの深度があります。青木湖の北は現在佐野坂山でせきとめられております。佐野坂は岩盤でできており、東西両山地の地層が獅子ケ鼻付近で接しています。木崎湖の南側は鹿島川の大扇状地の押し出しによって、せきとめられた形になっております。中綱湖と木崎湖の間では、東西両山地が数十mの距離にまで接近し合っております。三湖の周辺の地形を詳細に調査してみることも、湖の歴史を知るのには必要です。

湖底の堆積物は少なく、特に青木湖は湖底丘があり岩盤が露出さえしております。木崎湖は稲尾沢や中部農具川の三角州が発達しており、埋積が進んでいます。しかし、諏訪湖などに比較すると、透明度も大きく汚染も進んでおりません。

仁科三湖は流入する河川が少ないのに、農具川によって相当量の排水が行われているので、湖底湧水によって補われているようです。

湧水といっても周囲の山地に伏流した雨水が湖中へ顔を出しているわけです。昭和二七年の青木湖総合開発以来、湖水のバランスがとれなくなり、減水時には湖岸が露出して景観をそこねます。

一本の河川で貫流されている湖沼群の場合は、一般に下流のものほど澄んでいる傾向があるのですが、仁科三湖では上流の青木湖が最も透明度が大きくなっております。三湖の環境をみながらその理由を考えてください。

仁科三湖がかつて一連の湖であったか否かも興味のもてる問題です。湖岸の地形や堆積物の様子からみて、現在より広かった時代やや狭くなった時はありました。しかし、青木湖と木崎湖の水面の高さは六〇m近くありますから、現在の地形でみるかぎり続いていたとは考えにくいわけです。湖岸の新しい堆積物の厚さは相当なもので、木崎湖北では七〇m以上あり、中綱湖西でも四五mもあります。

佐野坂は幅数百mの小さな丘陵です。これを境にして青木湖面と神城平とは七〇mもの高差があります。姫川の発源とみられる親海（おやうみ）は青木湖の漏水ではないかといわれるのも無理がありません。科学的に探究してみれば面白い問題です。また、神城の平自身、かつて湖水ではなかったか（化石湖）といわれ、ガグモ原を中心とした湿原の保存が最近話題になっております。

（梓川高等学校長）

東西両山地が迫っている中綱湖南

御岳の煙りを見ない記

横内　斉

御岳が長い眠りからさめて、突然噴火したのが昨年の十月二十八日であった。それから急に思い立って十一月十四日、老妻を伴い、木曽の開田へ行く地蔵峠から、御岳噴火の煙りを見ようと、木曽福島の駅頭に下り立った。バスが出るには未だ二時間余りもある。

近くの御岳教本庁に見る。一角に国常立命の銅像その他が飾ってある。余り美術的とは言えないと思う。

眼を町並に移すと、木曽川が水量豊かに流れており、城山がそれを圧して立ち、針広の森におおわれている。木曽福島の方々が、観光立町を町是の一部とされるならば、なぜこの城山を活用しないのかと思う。私が町民の一人ならば、有志を語らいエゾヤマザクラ（オオバナヤマザクラ）を挿木して、一年に百本なり二百本なりを植栽し、十年後、二十年後には、一大サクラの名所に仕上げ度いと思う。あのサクラは、色も紅く濃く大形で、花期は一般の山桜類より少しおくれるが、葉に先き立って花を開き、開花期間も少し長いようであり、なかなか大木になり、樹令も百年以上も保ち見事である。

こんなことを夢想しているうちに、バスの発車時間となった、乗客は私共夫婦の外に、近在のお百姓の年輩の婦人が七、八人と、高等学校の女生徒七、八人である。

福島の狭い町中を疾駆して黒川ダムを捗り、黒川の狭谷を西に進む。木曽山林高校付近からはやや広く山裾に人家、畑、道路、田とあり、左の山裾に黒川が流れているが、約三、四キロも登ると、ホントウ山の裾合で、黒川の一つの源流と道路のみの狭さになる。

やがて木の間がくれに唐澤の名瀑が姿を現す、堂々落ちる水勢はものすごく、それこそ白布をさらすが如くと古い形容だが記す外ない、落下すること幾十メートルか。

道はここから登りになって、この滝の上に出るのである。大曲りを幾度かして滝上に出、更に西に向って進む、地蔵峠の旧茶屋はどのあたりか、名木縁結びの木はどの辺かと、指差す間なく峠頂上に着く、西方にあこがれの御岳の裾野が見える。寄生火山の三笠山も指顧の間にあるが、そして王滝口頂上の斜面も見えるが、残念、目ざす噴火の煙りはもう幾十メートルかの上であろう、雲の戸張りに隠されている。

峠の山腹を大曲りすること幾度、開田村の末川、西野の高原は広く展がっており、その中央を王滝川の支流が白く貫流している。

末川部落と杷ノ澤部落の、中央を道路は貫通して、やがて西野峠の南の裾を大きく迂回して西野部落に入り、旅館分に旅装を解いた。

私がこの開田に入った初めは、大正の末期で、たしか大正十四年だと思う。それから上松小学校（当時は駒ケ根小学校）、福島小学

校との二校に、前後五ケ年在勤するうち、毎年のように一回は必ず訪れ、この分に一泊して地蔵峠を引き返すか、西野の下の部落柳又を経て、三岳村黒沢に出て帰るかした。

戦後二十一年から十六年間、上野益三理学博士のお進めで、京都大学理学部付属木曽生物学研究所の研究員として在勤した時も、二年か三年に、ここ開田を訪れたもので、この分さんにお世話になった事は、十数回に及んでいる。

大正末年から昭和の大戦前までは、それこそ鳥も通わぬ、バスも通らぬ秘境で、ただ木曽馬と木曽人と稀に行商の荷を負うた人と異邦人と言えば私ぐらいであった。

当時の西野は木曽福島を去る六里（約二十四キロ）で、その間に地蔵峠という大峠と西野峠という小峠を越えなければならない。

その頃の信州の秘境と言えば、上水内郡鬼無里村、下高井郡堺村秋山地区（現下水内郡栄村）、南佐久郡川上村と隣村南牧村野辺山地区、下伊那郡上村と現天龍村一帯とそれにここ木曽郡開田村と南安曇郡安曇村と奈川村（当時は木曽郡）、北安曇郡南北小谷と中土の三村（現小谷村）を指したものである。

このうち上水内郡鬼無里村は、裾花峡の奥の今池のミズバショウと裾花峡を売り出しているが、ミズバショウの規模はまあ信州第一の折紙をつけられようが、裾花峡の方は河岸と背後の森林を伐採したので、その神秘性は殆んど失なわれている。今池の池中のヨシも問題で、今のうちに手を入れないとミズバショウがヨシに圧倒される恐れが多分にある。これの収入ぐらいでは、村の経済にそうプラスにはならないであろう。

旧下高井郡堺村秋山地区は、その豊富な温泉と、苗場山大湿原の美観や鳥甲山の岩壁、また平家落人の伝説、人情の素朴さ、稀な積雪量など、好条件は備っているが、なにをいうにも信濃のうちでも殊に東北に偏した位置にある為、その開発はむずかしい問題である。

次の南佐久郡川上村と南牧村は、近来この方面からの関東山脈と八ケ岳連峰への登山、川上村の高原野菜、野辺山高原の牧畜など見るべきものが多い、殊に野辺山駅は国鉄第一の高所に位置し、四時観光客が絶えない。ここへSLでも動かせば、それこそ鬼に金棒で本邦第一の人口密集地である首都圏に最も近く、中京圏にも比較的近いのであるし、小諸初め沿線には歴史、文学方面の勝れた所が多いので、赤字国鉄にも幾分の寄興があろう。

下伊那郡上村と天龍村は、東方に赤石三山、聖岳など三〇〇〇㍍級の名だたる山岳に囲まれ、天龍川の峡谷をもっているが、東方の山岳に攀じるには小渋口三伏峠などより近い登山道にお株を奪われ、天龍の峡流は平岡ダムとなって、村の経済にプラスしているが、個人的な収入には無関係である。

木曽郡開田村のことは後述にゆずり、南安曇郡安曇村と奈川村のうち、安曇村は英人宣教師ウエストン師が近代登山の草分けをして以来、徳本峠によってその命脈は余り太くもならずに受けつがれていたが、東京電力が梓川沿いの道を開き、県が最大難所の釜トンネルを拡巾、各所にスノーセットの構築などの施設をし今もなおこれを続け、より安全なより快適な道路を造るのに専念しつつある為、天下の峡谷美、山岳美をあつめた上高地に遊ぶ人を呼び、近来は夏の最盛期、秋の紅葉の最盛期には、自家用車の入山を規制している。直接、間接村経済の消長に興っている。

乗鞍岳は北の立山と共に、頂上近くまで車で行け、信州側の裾野には豊富な温泉、名瀑、春、夏、秋、色彩豊かな草木等、人々を招く要素に事缺かぬ、ことにスキーは殆んど一年を通じて可能で、僅かに八、九、十の三月ぐらいがその恩恵に沿わぬ程である。

野麦峠は、近来山本茂実の「ああ野麦峠」によって、その声価を高めたが、何をいうにも信州の西側として余りにも奥地すぎ、殊に奈川村川裏から峠を越え、岐阜県の甲（かぶと）間の約四十キロは車を通さないので、これが開発のネックとなっている。

北安曇郡小谷三村南小谷、中土、北小谷（現小谷村）は、夏は白馬三山を初め北ア北部の登山基地とし、冬は恵まれた積雪を利用し、到る所にスキー場と民宿を開いている。また中土地区には豊富な小谷温泉が湧き、ここを基地として近くの鎌池、鉈池の散索、乙見峠やそこを流れる大海川（おおみがわ）の名瀑を尋ね、北に聳ゆる雨飾連山に遊ぶ人も見られる。

大正末期から昭和初めの開田は、戸数五、六百と思われるが、皆大きな長板葺きの家であった。屋根の傾斜はゆるやかであるが、御岳嵐を防ぐ為、その長板の上には皆石をのせてふせいでいた。

入口を入った所は台所の土間で、家の造り方に依って違うが、右側または左側に馬屋が並列し、どの家でも体駆はやや小さいが、粗食に堪え、農耕に強い所謂木曽馬を飼い、最盛時には、全村で七、八千頭に達したという。

入口の表には小便所がしつらえ、男女共に小用を足した、馬はこれを見て、あの大きな鼻ノ穴をふくらませて、フフ…という荒い鼻息を吐いたものである。

大きな囲炉裡には、太い榾がくべられ、二六時中、年代を経た黒い鉄瓶の湯はたぎり、馬の飼ばがグツグツと煮られていた。自在鍵は先祖代々の木ヤニをかたまらせて、鯉の鉤付もそれを支える竹筒も縄も、ヤニの固まりで飾られていた。

まことに馬も家族の一員であった。

開田の馬飼は、いわゆる馬小作で、福島町あたりの馬主から小馬を借り、それを育てて一匹前にして、毎年開かれる馬市に出し、その売上げの一部を馬主に払い、残りを飼料とする一種独特の制度であった。

当時の開田には、面白い奇習が残っていた、この原始時代からであろう、奇習は、大戦後も数年は生き残っていたが、外界との接触が進むうちに、急迫に一般化されてゆき、当三十才以下の年令層の人達には夢物語りであろう。

その頃の開田の家の多くは外便所だったように思う。なかに入ると、小箱なり小ビクなりが必ず二つ入っていた。一方には真新しい木片が入ったおり、一方には使用済みの木片が入っていた。これだけでは何だか不明だが、この使用済みの方を説明すると釈然とする。

用を足し終ると、お尻を拭うのに木片を使ったもので、木片の厚さは割箸の半分ぐらい、巾は三㌢前後、長さは二十㌢ぐらいと思う。

よくもあの堅いもので拭いて痔にならないものだと、余計な心配をした。下桶に使用済を落さないのは、不肥をよく腐熟させて肥料に使うからで、これが入ると汲み出しに邪魔になるからだ。

夕方村内を少し歩くと、あのなつかしい石屋根はすっかり消えて、すべてカラートタンに変り、唯一軒残るのみであった。西野川と並行して村を南北に縦貫していた道路は、拡巾されて舗装され、それに並行して流れた用水は細々となり、そこに連って建てられた昔なつかしい水車はすべて姿を消し、村の富豪山下家も母屋と倉庫を残すのみとなり、往時を語るものは、門前に残るエゾマツザクラの老木と、本屋の破風の下側にある彫刻のみとなった。やがて吹雪いて来たので引挙げた。

翌日も王滝頂上は眺められなかった。郷土館に第三春山号の剝製を見、末川に稗田の碑を尋ねて、またも地蔵峠を越えた。荒れるなかで、道の斜面の整備が行われていた。

（東筑摩郡四賀村）

山と博物館　第25巻　第2号
一九八〇年二月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL②〇二一一　大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額八〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野一三、二九三）